

## 都市における非行発生と地域性の関係

### (4) 被害調査の非行予測可能性

倉 島 敬 治\*

(昭和51年7月13日受理)

### 序

今まで、都市における非行発生(抑制)と地域性の関係を明らかにするため、長期にわたる縦断的横断的両側面からの継続的調査研究の成果を報告してきた。

今回は、非行発生(抑止)の直接的指標として設定した被害調査の結果、即ち、被害内容、時間、場所、加害者との関係及び人数、その時の対処法などについて分析したところ、これらが非行発生の予測可能性を持つことが明らかになったのでここに報告したい。

そこで、幾つかの事例をとりあげて、被害調査の非行予測可能性について重点的に報告してみたい。

もともと、この被害調査は実際には表面化(顕在化)していない潜在非行・ぐ犯・問題行動を被害者の側から接近しようと工夫されたもので、犯罪・非行の研究法としては非常に有効、有力な方法と言える。

加害者は自分に不利な情報はあえて報告しないし、逆に被害者は軽微な被害の場合でも心理的に仕返しされないことが判れば訴えてくるし、取りあげて欲しいと願っていることが多い。

スクリーニングとして潜在的非行、問題行動の探索、悪染環境の実態が把握できるので生徒指導の面からも有効な手段であろう。

調査の意図によって方法も対応して変わってくるが、これまでの研究の結果からは次のようなことが留意されることが望ましい。

1. 簡単な質問紙法によるアンケートで短時間に実施できること。

2. 無記名であること。これは調査目的、意図からも守る必要があり、記名にすると記入された量は激減するばかりでなく、実態とずれてくる恐れがある。

指導上、加害者名、被害者名がはっきりすれば容易に直接的、時間的無駄がなく、楽だろうと思うだろうが、心理的抵抗に合って、調査そのものの意味がなくなり、中途半端になってしまう。

3. 実施時間、回数。実施時期は夏休み後、正月休み後1か月後がよい。直後では十分に休暇中の変化が態度、行動として現われない。回数は2回/年くらいが適当であろう。多すぎると抵抗感が増してくる。副次的効果として、学校側(職場)がこのような問題に積極的に熱心に取り組んでいるな……という好印象を被害者に与え、逆に加害者にはあまり目立つと見付かって指導されるかも知れないと、自制が働らくことになる場合がある。

4. 犯人探しはやらないこと。被害率が高く出ると直接加害者を探し出し、補導、指導を直接やろうとするが、それまで野放しにしていたことを反省し、積極的な対処の方法を検討し

\* 岩手大学教育学部

ラスの方向に進めることによってマイナスを減らすようにした方が効果がある。

この被害調査は、言い換えれば警察の捜査と似ていて、いわゆる「聞き込み」を多人数、同時にやるのと同じことであって、学校や職場は犯人を探すことが目的でないのであるから、教育的、処遇的対策を見出すよう努力しなければならない。

まず、何故このような問題行動によって環境が悪染されるようになったのか検討し、それに対処する方策を探ることが急務であって、加害者探しに夢中になることは避けたいものである。

問題行動→ぐ犯→非行への発展を予防し積極的指導への転換をはかる一つの資料として、被害調査の非行予測の可能性が位置づけられることが望ましい。

## 問 題

被害の場所と被害数の組み合わせから、加害—被害者関係を類型化すると次の表のような類型が想定される

表1 被害場所と被害数による類型

	校 内	校 外	悪染環境と接触
1	*少	*少	無し
2	少	多	有り
3	多	少	内部悪染有り
4	多	多	内・外部悪染有り

\*被害数の多い、少い

1の場合、調査対象は少なくとも悪染環境と接触していないが、外部での非行や問題行動に直接触れていないことは確かであるが、悪染されていないと断定は出来ない。顕在非行の有無を調べて確認する必要がある。

2の場合、校内は比較的落ち着いて校外での被害が多い場合で、問題行動や非行が校外で活発であるため悪染環境との接触が考えられる。外

部との連携による防衛が必要で、当該校だけではどうにもならないので地域へ働きかけることが望まれる。自衛しないといずれは自校生徒にまで感染が及ぶことになる。

3の場合、校内に加害者が多く居る場合と校外から襲来してくるため自校生徒が常に被害を受ける場合とがある。被害の場所と被害者と加害者の関係から区別することが出来るが、多くは前者の場合である。

4の場合、校内、校外ともに非行や問題行動が多発し、校内外とも悪染が進み校内にもかなり積極的な非行者や問題行動者の存在が認められ、表面化して補導や事件に結びついていく懼れがあり、放置しておけば時間の経過により容易に顕在非行となり、社会問題あるいはマスコミを騒がすようになることが多い。

このような類型分類することから、被害調査の結果を分析、検討してみると、校内、校外、両者の関係が明らかになり、環境の悪染の診断をすることが可能となる。

更に発展させて、非行の予測についても外部の顕在化非行の動向を補導資料から得ることが出来るので、ある程度可能性が出てくる。

しかし、被害調査だけでは、1の場合、校内(自校)の加害者が校外で他校の生徒や、一般人に被害を加える場合、2の場合、同様校内(自校)の加害者が校外で頻繁に問題行動を起こし、被害を与えている場合、外部で自校の生徒には手を出さない時には区別がつかないので、なんとも言えないことになる。

あくまでも、調査対象の行動範囲内での環境診断、非行予測とならざるを得ない弱点はあるが、前にも述べた通り外部の情報を補助資料として用いることにより、補間することが出来る。

## 目 的

前述した問題を十分考慮しながら、具体例にもとづいて、非行予測の成功例2例—3と4の類型に該当する、失敗例1例—類型1に該当する、を取りあげて、被害調査の非行予測可能性について検討しようとするものである。以下順を追って論及してみたい。

事例1. C高校、類型4、校内及び校外での被害数多の場合に該当する。

調査時期; 10月初旬 (1回目, 2回目共)

調査数; 184名 (男・女)

調査結果; 表2, 表3

表2 被害率 (単位%)

学年	男子	女子	計
1	34.4	37.5	36.0
2	18.2	26.7	21.0
3	36.2	54.0	45.0
計	31.7	43.4	37.8

表3 被害内容

(M.A.実数)

被害内容		学 年	1		2		3		
			男	女	男	女	男	女	
A なにをされ たか	イ	なぐられたり, 傷つけられた	12	1	1				
	ロ	金や物をとられた	7	4		3	15	5	
	ハ	まちぶせされたり, あとをつけられた		2		2		5	
	ニ	いいがかりをつけられた	6	2	1		3	1	
	ホ	むりに交際を求められた	4		1		7	2	
	ヘ	へんな人からドライブにさそわれた		7				8	
	ト	からかわれたり, いやらしい言葉をいわれた	1	3	2			8	
	チ	衣服にいたざられた		1			1		
	リ	だきつかれた							
	ヌ	からだにさわられた						11	
	ル	酒やたばこをすすめられた	1			2	1		
	ヲ	夜あそびをすすめられた		1		2			
	ワ	その他, めいわくをうけたことがある	2	4	1		3	1	
B どん な時に された か	1 曜日	イ	日曜日, または休日	2	10	3		4	10
		ロ	ふだんの日	14	12	2	7	19	30
	2 時刻	イ	午 前	5	2	1	2	3	8
		ロ	午 後	4	9	2		8	16
		ハ	夕 方	6	8		2	4	15
	3 人数	ニ	夜 間		4		2	2	4
		イ	自分ひとりであるとき	4	11	1		5	15
ロ	友だちとふたりであるとき	4	9	3		5	14		
ハ	友だちと3人以上であるとき	2		1	1	3	7		
C どこでされ たか	イ	学 校 ( )	16	5	2	4	16	6	
	ロ	会 社 ( )							
	ハ	家 の 近 所 ( )		4	1			6	
	ニ	汽車, 電車の中 ( )	2					8	
	ホ	バスの中 ( )						2	
	ヘ	駅 ( )	4	3	1			3	

( )内には盛岡駅、△公園などの地名を記述してください	ト	映画館 ( )								
	チ	遊戯場 ( )								
	リ	喫さ店 ( )								
	ヌ	デパートや商店 ( )						1	2	
	ル	にぎやかな道路 ( )		1				1	3	
	ヲ	さびしい道路 ( )		5	1	2		1	5	
	ワ	公園 ( )		2	1	1		1		
	カ	川原や土手 ( )								
	ヨ	神社や寺の境内 ( )						1	3	
	タ	海や山, キャンプ場 ( )								
レ	プール ( )									
ソ	その他 ( )		4			2		1	1	
D だれにされたか	1	年齢								
	イ	年 下						4		
	ロ	同じ年くらい		4	2	2		9	6	
	ハ	年 上	14	14	3	2		4	27	
	イ	ひとり	9	6	1	3		7	19	
	2	人数								
	ロ	ふたり		4			1		12	
	ハ	3人以上	10	6	4			5	4	
	3	あなたとの関係								
		イ	同じ学校の人	18	1	1	2		11	5
ロ		同じ会社の人								
ハ		近所の人		1						
ニ	知らない人	3	13	4	2		4	34		
ホ	その他		7				2	1		
E そのときあなたはどうしたか	イ	だれにも知らせなかった	8	4	2	2		3	10	
	ロ	けいさつにとどけた							2	
	ハ	学校の先生, 会社の上役にとどけた	3				3		9	
	ニ	家族に話した	1	7				4	6	
	ホ	友だちに話した	6	15	3	6		9	25	
ヘ	その他	4					1	1		
F そのときあなたの服装はどうでしたか	イ	職場あるいは学校の制服	19	11	3	6		15	29	
	ロ	制服以外のはでな服装		1	2	1			1	
	ハ	制服以外のじみな服装	1	8		1		2	10	
	ニ	その他		3						
		人 数	32	48	22	15		47	50	

## 診断及び予測

### 1. 全体的傾向

質問に対してどの程度の忠実度で回答しているのか疑うほどの非常に高い被害率を示した。特に1年, 3年の男子と女子が著しい高率で30%を越えている。男子の場合は校内多, 校外少で類型3, 女子の場合は校内少, 校外多で類型2で, 全体としては類型4となっている。「ふざけて」「いい加減に」「他人も書くから」といった回答の態度は, 男子生徒が女子生徒の受ける被害へ, ト, チに記入してないことから否定できる。

一般に, 校内での問題行動や非行が多い場合, 低学年になる程被害は増加するのが普通である。いわゆる下級生いじめである。しかし, 本校では3年生の被害率が多いのが特徴で, 被害を受けた場所も校内とするものが男子に多く, 問題行動, 非行の加害者が多部から来ることがなければ, 校内の悪染はかなり進んでいて問題となる者が自己増殖されてる危険性がある。

一方, 女子の場合, 校外での一般人(青年, 成人を含め)からの被害や誘惑がかなり多いことが予想される。彼女達は自分から繁華街, 歓楽街, 海山の自由奔放な好ましくない環境へ出向いて, 加害者と接触しているものとも考えられる。このように悪染環境に積極的に接することは, 加害者の側の責任のみ追求することは片手落ちであって, 被害者の方にも当然, 責任が問

われてくる。被害者の方にも生活態度に問題があったり享乐的欲求がかなり強く、被害を受け易い性行、条件を有するものと見ることが出来る。

被害者→加害者、加害者→被害者、被害のみ受ける者、加害だけする者、これ等が混在して、問題行動が顕在化して非行となり校外で補導を受けるようになるのは時間の問題と言えるほど、環境の悪染は進んでいると推測される。被害率30%は問題行動が極めて活潑に発生しており、流動している一つの指標となる。

## 2. 被害内容の分析

盗み(金品の窃盗)の被害がもっとも多いのは3年男子、次いで1年男子である。場所から見て校内での窃盗が頻発していると考えられる。粗暴行為の被害は1年男子に多く、上級生のしごきやリンチ、下級生いじめで一般に伝統的な現象と言える。性的な被害は矢張り女子に多く、3年、1年に多く出ていて校外で年上の見知らぬ人から受けている。このような悪染環境に接触しているうちに不良集団に引き込まれたり、落ち込んで行く危険性が非常にあるのだ。下級生が進級して上級生になった時、加害者へ移行するサイクルは繰り返される懼れが強い。

被害者学の研究成果によると、被害を受けた者が手口や技術と学習し、やがて加害者へ移行することによって、非行、犯罪文化が引き継がれていくことを警告している。

各学年の被害内容の構成が変化していることに注目すべきである。

被害の届け出、その処理のしかたをみると、第1に届け出数が全般に少ないことに気付くだろう。教師、親と生徒との人間関係が円滑になっているのか、加害者からの仕返しが恐いなどその原因はいろいろあるだろうが、一考を要する。第2に、財産的被害は届け出が比較的多い。これは多くの場合、誰が盗んだか不明であるし、校外から侵入して盗むことも十分ある。しかし、粗暴被害の場合は、加害者は直接見て知っているのだから、被害の届け出は激減するのである。1年男子がクラブの部室で被害を受けていると回答しているが届け出は少ない。これらを総合してみると届け出は心理的抵抗の少ないものは多くなるが、抵抗の大きいものは減少すると推測できる。

## 3. 処遇指針

問題行動、非行からみた環境はかなり悪染されており、危険信号が出ている。潜在非行→顕在化するのには、放置すれば時間の問題であろう。早急に対処療法をとると同時に、生徒と触れ合って交流を深め、原因を探る必要がある。被害者→加害者への移行サイクルを断ち切ることが望まれる。特にクラブ活動における教師の無干渉状態はこの傾向を助長する。校外の非行(不良)分子との接触が進むと顕在化する素地を備えている。女子の場合、校外での悪染環境に自分から出向いて接触するのであるから、性についての理解、知識を正しく深める機会を用意する必要がある。届け出は直ぐには多くなることは期待出来ないが、生徒との人間関係を積極的に深めるとともに、年2回くらいこの被害調査を試みる必要があるだろう。

## 4. 予 後

上記、報告書のコメントから全校で対策が練られて、生徒指導、クラブ活動の指導等に改善がなされたにもかかわらず、4カ月後に非行は顕在化されて、警察の補導を受けることになった。傷害、恐喝、窃盗など成人を含む集団犯罪で逮捕されてしまった。

学校側はこれらその後処理に悩んだが、どうやら切り抜けて、指導体制を整えて行った。翌年は、学校側の都合、思惑から被害調査は実施されなかったが、中1年において2年目には協力してくれた調査結果は表4、5の通りである。

表4 被害率 (2回目) (単位%)

学年	男子	女子	計
1	13.9	23.0	16.3
2	33.3	8.2	23.1
3	15.2	11.9*	13.8*
計	19.4*	13.8	17.4

表5 被害内容

(MA, 実数)

被害内容		学 年		1		2		3	
		男	女	男	女	男	女		
A なにをされたか	イ	なぐられたり、傷つけられた	7		7				5
	ロ	金や物をとられた	6	2	11		1		
	ハ	まちぶせされたり、あとをつけられた		2		3		3	
	ニ	いいがかりをつけられた	7	3	9		4		
	ホ	むりに交際を求められた		4	1		6		1
	ヘ	へんな人からドライブにさそわれた		2		2			4
	ト	からかわれたり、いやらしい言葉をいわれた	1	3	1				4
	チ	衣服にいたずらされた			1		1		1
	リ	だきつかれた	1						
	ヌ	からだにさわられた	2	1					3
	ル	酒やたばこをすすめられた	1	3	3				1
	ワ	夜あそびをすすめられた	3	1	4				
	ワ	そのほか、めいわくをうけたことがある	1		1	1		8	
B どん な時に されたか	1 曜日	イ	日曜日、または休日	3	3	6		5	5
		ロ	ふだんの日	16	11	15	5	17	5
	2 時刻	イ	午 前	2	3	3			2
		ロ	午 後	9	2	9		14	3
		ハ	夕 方	6	7	7	4	3	7
		ニ	夜 間	2		1		4	3
3 人数	イ	自分ひとりであるとき	8	5	9	2	11	6	
	ロ	友だちとふたりであるとき	4	4	5	3	8	8	
	ハ	友だちと3人以上であるとき	5	2	4		2		
C どこで されたか	イ	学 校 ( )	8	8	7		6	6	
	ロ	会 社 ( )							
	ハ	家 の 近 所 ( )	1			1	1	2	
	ニ	汽 車 , 電 車 の 中 ( )	4	1	3	1	1		
	ホ	バ ス の 中 ( )	1						
	ヘ	駅 ( )	1	3	2		4	2	
	ト	映 画 館 ( )					1		
	チ	遊 ぎ 場 ( )							
	リ	喫 煙 店 ( )			2			1	
	ヌ	デパートや商店 ( )	1		1			1	
	ル	にぎやかな道路 ( )	1	1		1	1		
	ワ	さびしい道路 ( )	1	2	6	1	1	3	
	ワ	公 園 ( )		1				1	
カ	川原や土手 ( )								
ヨ	神社や寺の境内 ( )								
タ	海や山、キャンプ場 ( )			3					
レ	プ ール ( )			1		1			
ソ	そ の 他 ( )	3	2	3	1	1			
D だれ にさ	1 年令	イ	年 下	1				2	
		ロ	同じ年くらい	2	3	7	2	14	9
	2 人数	ハ	年 上	15	10	14	3	3	4
		イ	ひ と り	7	6	7		5	5
	ロ	ふ だ り	6	1	4	1	4	3	

れた か	3 あなた との 関係	ハ 3人以上	4	2	8	2	7	6
		イ 同じ学校の人	13	5	7		7	3
		ロ 同じ会社の人						
		ハ 近所の人						
		ニ 知らない人	6	12	10	5	7	9
		ホ その他		1				2
E そのとき あなたは どう したか	イ だれにも知らせなかった	5	2	5		11	4	
	ロ けいさつにとどけた	1		3				
	ハ 学校の先生、会社の上役にとどけた	2	2	1				
	ニ 家族に話した	3	2	2	4		2	
	ホ 友だちに話した	12	8	11		4	3	
	ヘ その他			1		4	3	
F そのとき あなたの 服装は どう でしたか	イ 職場あるいは学校の制服	14	10	14	5	9	6	
	ロ 制服以外のはでな服装		1	3		3	4	
	ハ 制服以外のじみな服装	4	2	4		4	3	
	ニ その他	2	1			3	1	
	人 数	122	44	72	49	79	138	

## 診断及び予測

### 1. 全体的傾向

前回に比し著しく全体の被害率は減少していることがわかる。前回1年だった生徒は既に3年（\*印）になっているが、被害率は半減している。校内での問題行動は上級生になると加害者側に転ずるので一般に3年では激減するのが普通である。前は3年でも被害率が高かったことが目立っていたが、これでいわゆる一般の学校並のサイクルに戻ったことが判明する。全体に鎮静してきたとは言うものの2年男子の被害率は30%で、次いで1年女子の23%が目立っていて、なお落ち着いたとは言いきれず不安が残っている。即ち被害を以前受けた者は、その経験を通して、自分は加害者になりたくないという自省を持つケースは稀で、多くは学習した結果加害者に移行する。このサイクルはなお残っていると判断しうる。学校側の生徒指導がかなり徹底したため幾らかは効果をあげていると思われるが、2年男子の粗暴的被害は校内で、年上の者（上級生）から受けているので、これらの被害者（2年）がいろいろと問題行動や派手な言動で目立ちすぎて狙われるのか明瞭ではないが落ち着いた環境とは言えない。

盗み（窃盗）の被害が相変わらず多く、相手は不明であることが多く、多部からの侵入盗か校内での自校生か区別できない。

1年女子は女性特有の被害を上級生、校内で受けているが3年女子になると校外が多くなり、見知らぬ年上の男性から受けている。

### 2. 被害内容の分析

なぐられたり、傷つけられた、などの粗暴的被害が相変わらず多く、1年、2年男子、3年女子に頻発しており、校内で受けている。

下級生いじめ、女性いじめの存続することが推測される。しかし、前回よりは減少している。校内での金品の窃盗被害の回答が次に多いが、これは単純な盗みの場合と殴られたり、脅されたりしてとられる場合（恐喝）が想定されるが、恐喝も含まれているようだ。同時に二つの項目に回答している場合はこれが予想される。

女子に多い被害、むりに交際を求められた、ドライブに誘われた、からかわれた、からだにさわられた、などは校外で知らない年上の異性から受けている。これは絶滅することは不可能

であるが、一般の成人女子、他校の女子の被害率と比較した場合、平均的であると言える。成熟してくれば当然異性から関心を持たれるようになるのであって、本人がある程度期待する場合さえある。

しかし、1年女子の場合は多少趣が異なり上級生からの被害であると推定できるので一考を要する。

被害の届け出、処理のしかたは相変らず教師、警察は極めて少ない、被害が軽微と判断したのか泣き入りしたのか、友人には話しているようだ。

### 3. 処遇指針と予後

前回同様の処遇指針をとり続ける必要がある。確かに被害率は全体に減少はしているものの、まだまだ鎮静化したとは言えない状態である。一寸した機会に活性化して顕在化する問題行動が十分に認められ、この段階で安心は出来ない。

公的な機関や先生に届け出ることは相変らず少なく、なお生徒との人間関係では改善すべき点が多いものと思われる。

男子の校内での被害は上級生からのしごき、下級生いじめのサイクルが断ち切られていないし、女子の下級生の被害も同様、上級生からのものと考えられる。

女子の外部での被害は悪染環境に接触する機会が多いのであるから、その意味で被害者側にも問題や責任のあることも考えられるので自覚と自衛が求められる。

以上は、予測的中したものへの対策、指導に成功しなかったケースである。

**事例2.** B中学校、類型3。校内多、校外少の場合に相当する。これは、当初、学校側が外部（他校）加害者説をとっていたが、調査結果から、自校内加害者説に変わったケースであった。（自校説を認めるに至った）

調査時期； ケース1と同じ

調査数； 236名（男134 女129）

調査結果； 表6，表7。

表6 被害率 (単位 %)

学年	男子	女子	計
1	22.9(10.0)*	16.0(4.8)	19.0(7.6)
2	36.5(14.6)	40.0(7.0)	38.0(10.7)
3	6.4(14.3)	4.4(18.8)	5.4(16.2)
計	22.4	19.4	20.9

\* ( )内は前年度

表7 被害内容

(MA, 実数)

被害内容	学 年		1		2		3	
	男	女	男	女	男	女	男	女
A なにをされ たか	イ	なぐられたり、傷つけられた	8		37	9		
	ロ	金や物をとられた	1	1	5	4		
	ハ	まちぶせされたり、あとをつけられた	1	2	1	1	2	
	ニ	いいがかりをつけられた	3		17	5	2	
	ホ	むりに交際を求められた				1		
	ヘ	へんな人からドライブにさそわれた		1				



		ト	からかわれたり、いやらしい言葉をいわれた		5	9	3		2
		チ	衣服にいたずらされた			12	6		
		リ	だきつかれた						
		ヌ	からだにさわられた		3		3		1
		ル	酒やたばこをすすめられた			2		1	
		ヲ	夜あそびをすすめられた						
		ワ	そのほか、めいわくをうけたことがある	1		19	29	1	
B	1	イ	日曜日、または休日	1	5	7	7	3	1
		ロ	ふだんの日	13	3	49	33	2	2
		イ	午 前	2		23	17		1
	2	ロ	午 後	6	4	32	27	4	1
		ハ	夕 方	1	2			2	
		ニ	夜 間	1	2	3	5		
	3	イ	自分ひとりでいるとき	4	5	25	10	2	2
		ロ	友だちとふたりでいるとき	3	1	14	8	1	1
		ハ	友だちと3人以上でいるとき	6	1	51	25		
C	どこでされたか	イ	学 校 ( )	10		82	34	2	
		ロ	会 社 ( )						
		ハ	家 の 近 所 ( )		3	12	7		
		ニ	汽 車 , 電 車 の 中 ( )					1	
		ホ	バ ス の 中 ( )						
		ヘ	駅 ( )						
		ト	映 画 館 ( )			1			
		チ	遊 ぎ 場 ( )				1		
		リ	喫 煙 店 ( )						
		ヌ	デ パ ー ト ( )	1	3				2
		ル	にぎやかな道路 ( )						
		ヲ	さびしい道路 ( )		4	2	3	2	1
		ワ	公 園 ( )						
		カ	川 原 や 土 手 ( )		1			1	
ヨ	神 社 や 寺 の 境 内 ( )								
タ	海 や 山 , キ ャ ン プ 場 ( )								
レ	プ ー ル ( )								
ソ	そ の 他 ( )	3			6	1			
D	1	イ	年 下					1	
		ロ	同 じ 年 ぐ ら い	5	3	83	30	1	
		ハ	年 上	8		14	13	4	3
	2	イ	ひ と り	4	8	56	23	2	1
		ロ	ふ た り	5	7	13	8	2	
		ハ	3 人 以 上	1		21	6	1	
	3	イ	同 じ 学 校 の 人	13		79	29	2	
		ロ	同 じ 会 社 の 人						
		ハ	近 所 の 人		3		5		
		ホ	知 ら な い 人		8	11	3	2	
		ホ	そ の 他			5	2	1	
E	そのときあなたはどうしたか	イ	だれにも知らせなかった	9	1	44	9	3	1
		ロ	けいさつにとどけた				1		
		ハ	学校の先生、会社の上役にとどけた			18	6	1	
		ニ	家族に話した	5	4	9	8		
		ホ	友だちに話した		7	12	24	1	2
		ヘ	そ の 他			15	1		
F	そのときあなたの服装はどうでしたか	イ	職場あるいは学校の制服	12	2	80	41	5	2
		ロ	制服以外のはでな服装		2				1
		ハ	制服以外のじみな服装	2	3	2	3	1	
		ニ	そ の 他		1	10	6		
		人 数	35	44	52	40	47	45	

## 診断及び予測

### 1. 全体的傾向

被害率は非常に高く危険域に達している。前年（ ）内に比し著るしく急増しているので、問題行動、非行の活潑な動きが伺われる。学校側では自校生徒より他校生徒の非行分子がいると積極的に働きかけてくるので大変指導上困っている、ということであった。他校の非行分子と自校の卒業生のグループが結びついて在校生を襲うので、再三、注意し集団のたまり場に出掛けて補導したこともあるということであった。

しかし、この調査結果で見る限り、この見方は間違っており自校生が加害者とみるべきである。それは被害を受けた場所が学校で、同じ学校の人が最も頻度が高いことから判る。前年に比べて発生率で約2倍近い被害を受けていることはその逆に加害者の存在が推定される。

特に2年生が男女ともに前年低率であったのにもかかわらず30%以上に及んでおり、同年令の者から被害を受けていることは、問題行動者の核は同年、2年生であることがつめとめられる。唯単に3年生の下級生いじめとは考えられず、又受身のものではなく加害者がいることは間違いない。それにしても異常に高い被害発生率である。

3年は最高学年で進学受験もあり上級生であり、被害はさすがに少ないが、1年は前年の2倍以上で、学校全体が2年の問題のあるグループか幾人かの非行分子によって荒れた雰囲気を作り出されているものと想定することができる。

個別に被害内容をみなければ判らないが、数え切れぬ程、反復して被害を受けていると訴えている者がいることによってこのことが裏付けられた。

女子がよく受ける被害、ト、チに男子2年が回答しているので、ふざけているのか調べてみると、それは真面目な訴えであった。

### 2. 被害内容の分析

粗暴的被害が2年男子に圧倒的に多く頻発し、次いで2年女子、1年男子となっているがかなり低くなっている。関連していいがかりをつけられた（因縁をつけられる）が同様2年男女に多く、同学年の加害者による同校内でのあった。

からかわれたり、いやらしい言葉をかけられた、衣服にいたずらされたという被害もかなり2年男女に多く出ている。その他の不明めいわくは2年女子、男子にかなり多く訴えが出ている。金品をとられるという財産窃盗の被害はそれ程ではなく、総じて問題行動や非行が2年（多分男子）生の中に活潑に動いている事がこの結果から明らかになった。

ふだんの日、校内で、同年の者から、校内の者から、学校の制服を着用時に被害を受けている。問題の生徒は誰彼となく八つ当りのように、かなりアクティブに迷惑な行動をしているものと考えられる。2年がその問題行動の主体であり、上級生（3年）による下級生いじめの類ではないようだ。

この2年の問題グループが発生源であるから、このグループの動きにつれ被害が頻発するものと予想される。

### 3. 処遇指針

被害率が30%を越すと環境としてはかなり問題があり危険な状態と言える。校外者より被害を受けていることはそれ程なく、内部の問題行動者が相当いるものと考えられるからグループ

の結束を堅めたり、予備軍からグループの自己増殖する恐れがあるから、早急に対処療法をする必要がある。

外部説に執着せず、本格的に全校あげて指導の具体策を建てる必要がある。

① 何故2年に被害が多発するのか、核となる非行分子には個別的に強力な接触をする必要がある。

② 軽微な被害まで、わざわざ記入しているのかどうか。この場合このようなことはなさそうである。

③ 学級運営や集団指導で問題者が逸脱しやすく疎外され易い雰囲気があれば、受容的な集団に変えていくことも大切。教師の側にもこの受容的な態度は要求されよう。

④ 2年の問題グループと外部の非行集団（チンピラ、etc）とのつながりがあれば、外部の専門機関と連携しないと無理である。他校の生徒指導担当の先生と連絡をとることも有効である。

届け出でや処理のしかたは、被害がかなりひどいので、だれにも知らせないが矢張り最多であるが、友人に次いで先生にもかなり訴えている。これは教師と生徒の人間関係が良好な為かも知れないが、被害が頻発して我慢出来ないほどになっている為とも考えられる。

#### 4. 予 後

問題の2年男子の成行きが注目すべき鍵となろう。最上級の3年になってもかなり残るものと予想されるが、一番不安にするのはグループが増大することと、被害者が加害者に移行することである。客観的な学校外の非行、犯罪的環境は比較的安定して鎮静していることが補導機関の情報から判っているので、校内指導に焦点を絞っていった方がよい。

当分の間、大変苦勞して対処していかなければならない。このような問題行動は短期間に効果をあげることはなかなか期待できない。悪化するのもじわじわと進行するのであるから回復するのもそれだけ時間がかかることを覚悟しなければならない。

このような事実報告を学校側は素直に認めて、本腰を入れて取り組み、外部との連絡も秘密主義を捨てて積極的に進めたようだ。

特に、教師側が、集団から逸脱した問題行動者を集団の態勢を受容的なものに作り変えて、集団自身による立ち直りをはかったことが効を奏して、非行グループの結束、増大を防ぎ、家庭に問題のある核となる生徒を明確に切り離すことに成功したようだ。

翌年の被害調査は学校側の要請もあって実施したが調査結果は次の通りであった。

表7 被害率 (翌年 単位 %)

学年	男子	女子	計
1	11.5	2.0	6.5
2	20.5	25.0	23.2
3	14.3	2.4	8.9
計	13.2	10.1	12.5

表8 被 害 内 容

(MA, 実数)

被害内容		学 年	1		2		3	
			男	女	男	女	男	女
A なにをされたか	イ	なぐられたり、傷つけられた	10		8		9	
	ロ	金や物をとられた	1		1	1		
	ハ	まちぶせされたり、あとをつけられた		3		2		
	ニ	いいがかりをつけられた	5		4		4	
	ホ	むりに交際を求められた						
	ヘ	へんな人からドライブにさそわれた				1		2
	ト	からかわれたり、いやらしい自棄をいわれた			1	8		
	チ	衣服にいたずらされた	1					
	リ	だきつかれた				2		
	ヌ	からだにさわられた				2		
	ル	酒やたばこをすすめられた						
	ワ	夜あそびをすすめられた						
B どんな時にされたか	1 曜日	イ	そのほか、めいわくをうけたことがある	1			4	6
		ロ	日曜日、または休日	1		3	4	2
	2 時刻	ロ	ふだんの日	12	3	13	13	15
		イ	午 前		3	6	4	12
		ロ	午 後	6		7	7	6
		ハ	夕 方			4	3	
	3 人数	ニ	夜 間	1			3	
		イ	自分ひとりでいるとき	9		7	7	5
		ロ	友だちとふたりでいるとき		3	3	4	9
		ハ	友だちと3人以上でいるとき	2		1	3	
	C どこでされたか	イ	学 校 ( )	12		15		15
		ロ	会 社 ( )					
ハ		家 の 近 所 ( )	1			5		
ニ		汽 車 , 電 車 の 中 ( )						
ホ		バ ス の 中 ( )						
ヘ		駅 ( )						
ト		映 画 館 ( )						
チ		遊 ぎ 場 ( )						
リ		喫 煙 店 ( )						
ヌ		デパートや商店 ( )			1			
ル		にぎやかな道路 ( )				3		
ワ		さびしい道路 ( )		3		6	2	
ロ		公 園 ( )				2		
カ	川原や土手 ( )							
ヨ	神社や寺の境内 ( )				2			
タ	海や山, キャンプ場 ( )	1						
レ	プ ール ( )			1				
ソ	そ の 他 ( )				4			
D だれにされたか	1 年齢	イ	年 下					
		ロ	同じ年くらい			3	2	14
	2 人数	ハ	年 上	11	3	13	18	3
		イ	ひ と り	7	3	8	14	7
	3 関係	ロ	ふ た り	2		6	2	1
		ハ	3 人 以 上	3		1	1	
		イ	同じ学校の人	12		16		15
		ロ	同じ会社の人					
	ハ	近所の人						
	ニ	知らない人				19		
ホ	そ の 他		3					
E そのときあなたはどうしたか	イ	だれにも知らせなかった	3		3	6	13	
	ロ	けいさつにとどけた	1					
	ハ	学校の先生, 会社の上役にとどけた	4		1			
	ニ	家族に話した		3		6	2	

F そのときのあなたの服装はどうか	ホ 友だちに話した	3	3	11	13	2	
	ヘ その他			1			
	イ 職場あるいは学校の制服	12		12	7	15	
	ロ 制服以外のはでな服装				5		
	ハ 制服以外のじみな服装			1	2		
	ニ その他	1	3	3	5		2
	人 数	42	50	34	48	49	41

## 診断及び予測

### 1. 全体的傾向

全体の被害率は急激に減少したようだ。

前々年とほぼ同じ被害率に戻っているのが判る。一応、前年に比べて問題行動の鎮静化が現われたとみて、荒れた環境も少し落ち着きを示し始めたと判断できそうだ。

全体の被害率は減少傾向を示しているものの、問題行動の核は3年生（前年時2年）になって相変わらず被害率は高く出るものと予想していたが、幾分か低くなった。3年の被害が男子に残っており、2年生が男女とも一番高い被害率で、校内、年上の人（上級生）から被害を受けていることから、悪染源は3年生であることが想定されよう。

現2年が1年の時に比べると大変な被害率の増であるが、全校では30%を切って、2年生でも20%台であるし、活性化から鎮静化へ向かっていると考えてよいだろう。

女子の校外での被害は一般平均値である。

2. 被害内容の分析3. 指針及び予後は省略する。予後について追記すれば、3年生が卒業すれば一応、沈静安定するものと予想される。確認のため被害調査の実施が望ましい。指導上、卒業生との校内不良分子との結びつきを断ち切ることが望ましい。

**事例3.** C中学校、類型1 校内及び校外での被害少の場合。毎年被害率が低いので学校も調査者（著者）も安心して、調査しなかった年に急に問題行動者のグループが発生し、遂に警察に補導され、マスコミにも取りあげられ報道されるに至った。いわば、調査結果からの予測の失敗ではなく、調査実施の判断の失敗といえる。

調査時期； 事件の顕在化する前年10月、

調査数； 276名（男、女）

調査結果； 表9

学年	男子	女子	計
1	15.1	2.6	9.8
2	4.2	15.7	10.1
3	12.2	31.8	22.4
計	10.6	17.2	13.8

表10 被 害 内 容

(MA, 実数)

被 害 内 容		学 年		1		2		3		
		男	女	男	女	男	女			
A なにをされ たか	イ	なぐられたり、傷つけられた				5		1		
	ロ	金や物をとられた		2	1	1	1	3		
	ハ	まちぶせされたり、あとをつけられた		1					4	
	ニ	いいがかりをつけられた		2				1		
	ホ	むりに交際を求められた							1	
	ヘ	へんな人からドライブにきそわれた					1		2	
	ト	からかわれたり、いやらしい言葉をいわれた		1			8		18	
	チ	衣服にいたずらされた		2	1					
	リ	だきつかれた								
	ヌ	からだにさわられた		1			2		4	
	ル	酒やたばこをすすめられた								
	ワ	夜あそびをすすめられた								
		ワ そのほか、めいわくをうけたことがある		3			1	2	3	
B どん な時 にさ れた か	1 曜日	イ	日曜日、または休日		3		6		5	
		ロ	ふだんの日		4		6	7	21	
	2 時刻	イ	午 前		1			2	2	
		ロ	午 後		5	1	6		2	8
	3 人数	ハ	夕 方		2			3	2	12
		ニ	夜 間					4		5
	イ	自分ひとりでいるとき		1			1		14	
	ロ	友だちとふたりでいるとき		1	1		5		7	
	ハ	友だちと3人以上でいるとき		4		5	5	2	7	
C どこでされ たか  ( )内には 盛岡駅、△ 公園など の地名を記 入してくだ さい	イ	学 校 ( )		3		6	1	4	5	
	ロ	会 社 ( )								
	ハ	家 の 近 所 ( )					4		1	
	ニ	汽 車、電 車 中 ( )								
	ホ	バ ス の 中 ( )							1	
	ヘ	駅 ( )		1						
	ト	映 画 館 ( )								
	チ	遊 ぎ 場 ( )								
	リ	喫 さ 店 ( )								
	ヌ	デパートや商店 ( )					1			
	ル	にぎやかな道路 ( )		1					1	
	ワ	さびしい道路 ( )		1			3		12	
	ウ	公 園 ( )		1			1			
カ	川 原 や 土 手 ( )									
ク	神 社 や 寺 の 境 内 ( )			1				3		
ケ	海 や 山、カ ン プ 場 ( )									
コ	プ ー ル ( )									
ク	ソ の 他 ( )					3	1	3		
D だれ にさ れた か	1 年令	イ	年 下							
		ロ	同 じ 年 ぐ ら い		2		5	3	1	
	2 人数	ハ	年 上		4			9	19	
		イ	ひ と り		3		5	6	11	
	3 なた と関 係	ロ	ふ た り		1			3	5	
		ハ	3 人 以 上		2			2	14	
	イ	同 じ 学 校 の 人		3		6	2	4		
	ロ	同 じ 会 社 の 人								
	ハ	近 所 の 人						5		
	ニ	知 ら な い 人		2	1		5	1	21	
	ホ	そ の 他		1			1	1		
E そのときあ なたはど うしたか	イ	だれにも知らせなかった		3			3	1	3	
	ロ	けいさつにとどけた			1					
	ハ	学校の先生、会社の上役にとどけた				1		3		
	ニ	家族に話した		1		5	2	1	8	

F そのときの あなたの服 装はどうで したか	ホ	友だちに話した	3			5	2	17
	ヘ	その他				5		1
	イ	職場あるいは学校の制服	5		6	8	1	20
	ロ	制服以外のはでな服装				1		5
	ハ	制服以外のじみな服装	1				1	2
	ニ	その他		1		3		
		人 数	53	39	48	51	41	44

## 診断及び予測

### 1. 全体的傾向

全校の平均被害率は10%台で、平均的数値であり、都市部の学校としては最少限やむを得ない被害率と言える。3年女子の校外での年長者による女子特有の被害が30%台を唯一つ示している外は低く安定した校内環境と言える。これは前年に比し僅かに増加しているものだが、(前年2年時)外部の悪染環境に自から接触して行くことに問題はあるにしても内部的には落ち着いていると言える。

このケースは純粋な類型1ではなく、3年女子が類型2になっている(30%台)ので正確には類型2とすべきであろう。

個別に調べてみた限りでは、3年女子の被害は軽微であったのでそれ程重視しなかった。コメントとしては、しかし30%台の被害率なので一応、警戒すべき指導助言を要するものとした。

生徒指導の面からは、問題行動や非行の顕在化は予想されないので環境的には安心出来るものとした。

### 2. 被害内容の分析、処遇指針及び予後

3年女子は校外で、通学途上とか、繁華街で、からかわれたり、いやらしい言葉を言われた、からだにさわられたといった内容の被害を年上の知らない人から受けている。単独でそのような場所を通らない、出向かないなど本人の好奇心もほどほどに自制するよう呼びかけたい。あまりこのような刺激を受けていると、慢性化して気にならなくなり、抵抗感が薄れてきて、本格的な被害を受ける可能性がよくあるから、自重するように働きかけたい。恥かしいのか、軽微なものだと感じているのか公的な届け出はしていないし、先生にも報告していない。

次に2年男子の粗暴的被害率が高く、校内で同年令(同級生)の者から被害を受けているのが目立っている。個別にみると特定の者が連続して被害を受けているので、加害者との関係を知るためにも、予防のためにも注意して観察する必要がある。

金品をとられたという財産窃盗の被害は各学年で散発しているが目立つ程のものではなかった。

以上を総合して、予後は比較的安定していると判断され、積極的な教育上の指導をすることで一層、問題行動は減少するものと予想した。

翌年には、学校側もこの方向で進め、教科指導、クラブ、スポーツ等の指導に専念していて大丈夫と思ったのか、被害調査を休むことにした。

ところが、その年の暮に、窃盗グループが結成され、相当額に及ぶ金品の盗みが校外、会社、学校の事務所荒らしという型で顕在化してしまった。勿論、警察の補導で終結した。

前年調査時の3年生は既に卒業し、新3年が集団の構成メンバーであって、夏休み前からぼつぼつと校内の被害が現われ、やがて校外へと発展し、校内の被害の訴えは気になる程多くならなかったので、そのまま様子を見ることにしたという学校側の説明があった。この調査は10月初旬に行われるが、もし実施していたら結果に兆候が現われていただろうか。

否であろう。窃盗のような物品、金が相手の非行や問題行動は被害者さえ気付かないことが多いのである。このケースでは、自校内では盗まず、校外へ出て盗むので被害は校外の無関係な人達であり、被害者は校内に居ないから、被害の訴えはこの被害調査でも出て来ない。

被害調査の限界は被害者が校外にいる時に効果が出ないところにある。もともと、この手段は加害者を調べても正直に答えないという弱点を補ない、裏から逆に加害者(問題行動者)の実態に迫る方法として工夫されたものであることを考えれば当然のことかも知れない。

更に、この分析が妥当性を持つかどうか、翌年被害調査をしてみれば、問題者は卒業して居ないから金品の窃盗被害があまり出て来ないだろうという予測が可能だから、それが確認出来るだろう。しかし、それでもなお、上述した限界は乗り越えられない。

## 要 約

被害調査の非行予測可能性について事例研究を通して検討してきたが、次のように要約することができる。

1. 問題行動者が校内にいる場合、被害が校内にいる場合には予測の可能性はある。
2. 上記1の場合、被害が校外者の場合、同時に校内でも問題行動に及ぶ場合には予測がある程度可能である。
3. 上記1の場合、被害が校外者のみで自校内にいない時は、予測は不可能となる。
4. 校内に加害者がいない場合、校外の問題行動者が活動している環境(場所)に自校生が接触し、被害を受ける時には悪染環境に出入りしたことが判る。その場合、被害者が加害者の手口、技術などを学習し、実行者に移行するならば、予測が可能になる。それ以外は、問題行動や非行に関して悪染された環境の存在が確認出来るだけで、自校内での問題行動発生は予測はできない。
5. 予測は時間的にどの程度、将来にわたって可能かという問題が残る。せいぜい学年の変わる同一年度内までであろう。長い場合でも、問題行動の核となる者がその問題傾向を持続するならば、その在学期間内までの非行発生の可能性を予測しうるだろう。

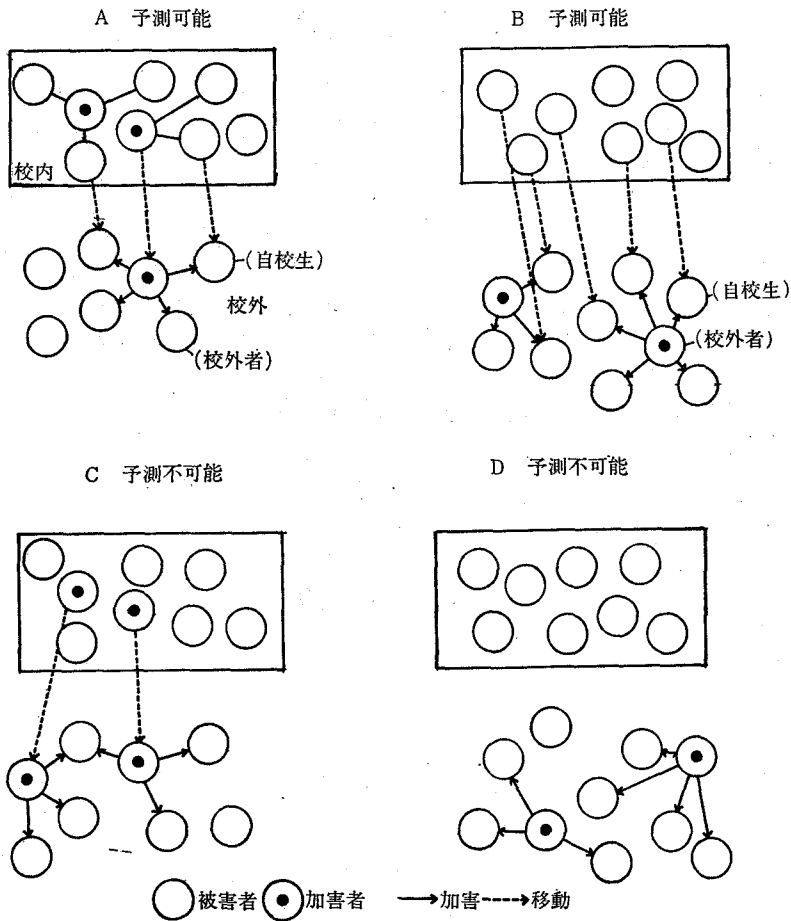
多くの場合、手をこまねいて放置することは少なく、何らかの教育的対策が検討され実施されるので長びくことはない。

これを図示すれば次のようになる。(図1)

図からも明らかなように、厳しい一方的指導、補導が行われると、A→Cの移行が起こり結局、環境は好転しても、問題行動者の本質的解決には至らないことがある。しかし、B→Dの移行の場合、ある意味で消極的ではあるが指導の効果を認めることは出来る。



図1 非行予測可能性



以上、被害調査による非行予測可能性とその限界について事例にもとずいて論及してきた。方法的限界はあるが、環境の診断、予測についての有効性は認められるので、補助手段として十分役立つものと考えられる。

勿論、グリュック夫妻 (Gluck, S. & E.) の非行の早期予測法の研究のように、ある個人 (少年) の、①性格、態度、情緒の成熟度、安定度、②体型、生物学的特性③、生育歴、生活歴、親の養育態度、親子関係、交友関係、などの家庭、学校、地域社会、文化とのかかわり、④衝動、欲求、葛藤、精神障害などの有無これらの諸要因 (特性) を調べて予測表を作成するような研究が本来、主流をなしているが、これらの研究から対照すれば社会学的 (行動科学的) 研究に被害調査を位置づけることができよう。

## 参 考 文 献

1. 遠藤 辰雄 「教師の行動観察による予測法の検討」 法務総合研究所紀要 1964
2. グリュック, S. & E. 「少年非行の解明」 法務省訳, 大蔵省印刷局 1961. Glueck, S. & E. 「Unraveling Juvenile Delinquency」 Harvard Univ. Press. 1950.
3. 館沢 徳弘 「少年非行の予測」 一粒社. 1961.
4. 泉屋 英樹 「対人非行場面における人間関係」 犯罪心理学研究 2. 1965.
5. 徳山 孝之 「簡便な予測技法に関する若干の試み」 犯罪心理学研究 16-2, 1974.
6. 法務総合研究所. 「法務総合研究所紀要」 第2分冊 予測研究特集号, 1960.
7. 松本 巖・西村 春夫 「男子初犯少年に関する再犯予測尺度の作成」 科学警察研究所報告. 防少編. 14-1. 1974.
8. Davis, C. & Paton, J. H. 「A delinquency predictive scale for thorne's inteegration level test series, J. clin. psychol., 28-2. 1972.
9. 山岡 一信. 「対人犯罪における被害者の有罪性について」 科学警察研究所報告. 防少編. 5 1964.
10. 宮沢浩一「被害者学の基礎理論」世界書院. 1966